



冥途の飛脚 亀屋忠兵衛（写真提供：三世桐竹勘十郎さん）

まあそう食わず嫌い言わんと、 1回見に来てください

三世桐竹勘十郎を襲名した文楽人形遣い

大阪・日本橋にある国立文楽劇場で、人形浄瑠璃・文楽の4月公演が開催されている。第1部のなかほどで上演されているのが「絵本太功記」。吉田簀太郎改め三世桐竹勘十郎さんの襲名披露狂言である。

人形浄瑠璃の舞台は、戯曲を義太夫節で語る「大夫（たゆう）」と音でリードする「三味線」、それに「人形」の三位一体で成り立っており、勘十郎さんは、そのうちの人形遣（づか）いである。

10キロもある重量の人形でリア

ルな動きを表現するため、1体を3人で操る。人形の首（かしら）と右手を担当する「主（おも）遣い」と、左手を担当する「左遣い」、2人の間で中腰になり人形の両足を担当する「足遣い」の3人で、これを「三人遣い」と呼ぶ。勘十郎さんはもちろん主遣いである。

父親は、人間国宝でもあった二世桐竹勘十郎さんだ。つまり、勘十郎さんが襲名したのは、父親の名跡である。古典芸能の中では、歌舞伎などでの世襲はよく知られ

ているが、文楽で父親の名前を襲名するのは珍しいと聞いた。人形遣いでは、1982年に襲名した五世吉田文吾さん以来の慶事となる。

それはともかく、襲名披露に臨む心境を、こう述べている。

「父親が2代目を継いで、勘十郎の名前が立役（男役）の大きな名前になっていますので、プレッシャーが無いといえばウソになります」と前置きしたあと、「父との芸風を比べますと、かなり違います。父は荒物といわれる豪快な立役を得意として活躍しましたが、僕はどちらかというと線が細いほうなので（笑）、勘十郎のイメージが少し変わるのには仕方がないかなと。時間はかかりますが、3代目のイメージを作っていきたいと思っています」。

襲名披露の「絵本太功記」ではその父親が得意とした豪快な光秀

文楽・人形遣い 三世桐竹勘十郎さん

1953年、大阪生まれ。父は二世桐竹勘十郎（人間国宝、86年没）、姉は女優の三林京子、長男は文楽人形遣いの吉田簀次。67年、14歳で文楽協会人形部研究生となり三代吉田簀助に師事、吉田簀太郎と名乗る。初役は翌年「壇浦兜軍記」の水奴。03年4月、大阪国立文楽劇場において三世桐竹勘十郎を襲名披露。引き続き5月、東京国立劇場小劇場において襲名披露。86年、大阪市の咲くやこの花賞、95年、芸術選奨文部大臣新人賞、99年、国立劇場文楽優秀賞など受賞歴多数。文楽公演の記念スタンプ用原画を担当しているほか、「日本の伝統芸能は面白い⑤吉田簀太郎の文楽」（岩崎書店）の監修など幅広く活躍中。

役を初演しているが、「父が光秀を遣った時に、その足遣いも左遣いも経験していて、今も体で覚えています。そうしたイメージや先輩方の光秀を手本に、自分なりの光秀をつくり出せれば」と話していた。

14歳で入門 人形遣いの世界へ

父親の弟子にあたる吉田簀助さん（現人間国宝）に入門したのは、14歳の夏である。吉田簀太郎の名で、文楽協会の芸芸員（人形部）となり、人形遣いへの道を歩みはじめている。

「あのころは、マンガや絵を描くのが好きでした。おぼろげながら、美術系の学校に行きたいとは思っていたのです」。だが、「昔の文楽座とか道頓堀朝日座とかの楽屋が遊び場みたいなもので、小さいころから師匠（簀助さん）は兄ちゃん、もっと上のおっちゃんと呼んでいた」という親しみも加わり、文楽を選んだ。

とはいえ“足遣い十年、左遣い十年”といわれる厳しい世界である。特に最初の足遣いは、主遣いと左遣いに挟まれ、しかも中腰で構える、つらい役割だ。やめたいと思ったことも「だれでも一度や二度はあるはず」と勘十郎さん。



菅根崎心中 お初（写真提供：三世桐竹勘十郎さん）

その壁を破るのは、「しんどい毎日のなかで、一度味わうとやめられなくなる瞬間があるんです。大夫、三味線、相手役はもちろん主遣い、左遣い、お客さんがパッと一体になるんですが、それはもう、鳥肌がたつような瞬間なのです」。体力的な辛さが吹き飛ば、こうした瞬間がある。それをもう一度味わいたいという気持ちが、修行を続けさせる、という。

現在では、女形遣いの名人である師匠（簀助さん）譲りの芸風から女形を得意としているが、踊り役や三枚目も評価は高い。特に「親父が十八番にしていた生写朝顔話の萩の祐仙は、こっけいな三枚目役ですが好きですし、得意な役のひとつですね」。

出張指導、文楽教室で 新しいファン開拓

「足遣い十年」というのは、新入りだからやらせているわけではありません。10年の中に将来、主遣いをするための基本が全部勉強できるようになっているんです」と力説する勘十郎さんも、初舞台から35年がたち、この3月に50歳を迎えている。

「ちょっと前までは、上のほうに十何人もいてはって、まだまだ若手やと。でも、今年50歳。いつまでも若手でもないなあと（笑）思いはじめています」。すでに人形遣いの、次代を担う中堅としての自覚も生まれているようだ。

文楽に対する愛着は、既存ファンの維持と新規ファンの獲得にも向けられている。そのひとつが、97年から出張指導に当たっている大阪府能勢町の「ザ・能勢人形浄瑠璃」だ。

能勢町は郷土芸能として200年の歴史を持ち、93年に府の選択無形民俗文化財、99年に国の無形民



小学生に人形指導。練習用の人形ぶん子ちゃん。（写真提供：高津小学校）

俗文化財に指定された浄瑠璃を伝承している。だが、三味線と大夫の語りだけで人形がない「素浄瑠璃」のため万人受けせず、衰退傾向に。そこで、地元から人形を導入するアイデアが出され、吉田簀助さんに協力依頼が持ち込まれた。

勘十郎さんらが能勢に乗り込んだのが97年。オーディションで選んだ35人を第1期生に練習を続けているが、現在では「能勢三番叟」や「傾城阿波の鳴門」などの公演を開催するまでになっており、「毎年6月に発表会をやるのですが、今年の演目は絵本太功記で偶然ですが僕の襲名披露の演目と同じ。楽しみにしています」と目を細める。

子どもに対する啓蒙も積極的だ。01年からは、高津小学校（中央区）で6年生に人形指導を行っている。幼稚園の子どもたち向けの新作も4本を超えた。「子どもにとっては、テレビゲームも文楽も一緒。新しいものとして、自分なりの面白さを見つけてしまうんです。だから小さいうちからのPRが大事ななと」。また今後の取り組みについても「現在の文楽ファンを減らさないこと。新たなファンを創り出すこと。そのためならどこにでも出掛けて、すそ野を広げたい」と意欲的だ。

「まだまだ文楽を知らない人が多いんです。大阪に生まれて住んでいる人でも『文楽？知ってるけど、難しいんでしょ』と（笑）。まあそう食わず嫌い言わんと、1回見に来てください」。襲名披露公演は4月27日（日）まで。5月には、東京・国立劇場でも行われる。

（文・脇本勤／表紙写真・高島悠介）